

大友篤著

『地域人口分析（ジオデモグラフィックス）の方法
—国勢調査データの利用の仕方—』

日本統計協会, 2002年3月, pp.208

本書は、主に国勢調査データを基とした種々の地域人口分析（ジオデモグラフィックス）手法の基礎について解説されたものである。地域人口について述べられた書はこれまで非常に少ないが、空間的な人口分布や人口移動の分析手法についてマニュアル的に説明されている本書では、幅広い読者層が想定されている。

本書は10章から構成されているが、大別して3部にまとめられよう。まず第1章から第3章までは序章といえるもので、地域人口分析の意義と、分析に必要な地域と人口の様々な概念について整理されている。第4章から第9章までが本論であり、各種地域人口分析の具体的な手法について、豊富な実例とともに解説されている。第10章においては地域人口分析研究に関する現状について述べられている。我が国における研究は北アメリカやイギリスと比較して遅れているが、今後その必要性が認識され需要も拡大するであろう、と結ばれている。

内容的には同じ著者による『地域分析入門（改訂版）』あるいは『日本の人口移動』と重複する部分も多いが、本書『地域人口分析の方法』においては、より実用に即した形で書き下ろされており、とりわけ国勢調査データの利用には大変参考になる。確かに管見の限りでも、一般に公開されている国勢調査データがメソスケール以下の地域分析において有効に利用されている例は、極めて少ない。本書はそうした状況に対して一石を投じるものであり、データの利用例を交え、様々な分析の糸口を提供している。

また実例に利用されているデータとして、都道府県や市区町村別のほかに、基準地域メッシュなどの小地域データが多く含まれていることも特筆すべきである。「平成の大合併」により、市町村合併が急速に進展することが確実となるなかで、恒久的な空間単位である地域メッシュや基本単位区などのデータは今後より一層重要視されるようになるであろう。実際小地域データは今後の地域分析のための中核を担うデータになると考えられ、本書においてもこれらを利用した分析の有用性が随所で指摘されている。しかしその意味では、市区町村より小さな空間単位のデータも、インターネット等を通じて手軽に入手できるようになることが望まれる。地域人口分析の発展には、小地域データの共有化・共用化が不可欠であろう。

「まえがき」にも示されているが、本書の主たる目的は国勢調査データの利用マニュアルである。各章ごとに分析のテーマを設定して個別の分析手法を紹介していく形式も、その点が考慮されていると思われるが、研究を行う観点からすれば、一連の地域研究の流れのなかでどの種の分析が取り入れられ、さらに分析結果をいかに解釈すべきかということが説明される形式の方が、それぞれのケースに即した分析手法を習得しやすいであろう。第10章では、国内外における地域人口分析の事例に基づいたデータの利用に関して説明され、例えばGISを利用した我が国における土地形状別人口統計の作成について述べられているが、このような点ももう少し強調しても良かったと思われる。ただ、本書の主旨からは若干外れると思われるので、ぜひ続編を期待したいところである。

いずれにしても本書は、地域人口分析のあらゆる可能性を示し、全体的な構成も分かりやすくまとめられた好著である。特に入門書として最適であると思われるので、地域人口に関心のある方々に是非一読をお薦めしたい。

(小池司朗)